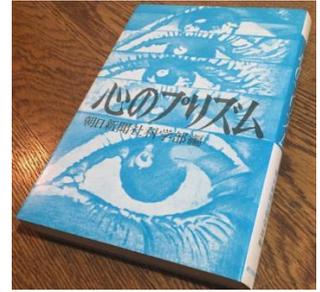


## ■われら無期囚■

小柄な囚人が、頭痛を訴えて医務室へやってきた。具合が悪いというのにひどくはしゃいでいた。

しきりにシャレをとばす。笑い声をあげる。笑いながら不意に涙をうかべる。奇妙な泣き笑い。

陰気な拘置所のなかで、かれのふるまいは、いかにも唐突だった。



「かれは何かを恐れ、同時に何かを楽しんでいました。その異常な心理は、新米精神科医として着任したばかりの私には、まったく理解できませんでした。」と小木真孝上智大教授は回想する。

「かれは死刑囚だったのです。その異様な心理に魅入られ、日本全国の拘置所の死刑囚をたずね回りました」

面接した44人の死刑囚。その8割が、最初に医務室であった小柄な囚人とそっくりだった。

かれらには、はちきれんばかりの感受性があった。何を見ても何を聞いても、かれらの心には、鮮明に、感動的に刻みこまれるようだった。

とにかく、せわしないのである。

ひと晩に20句も30句も俳句をひねり出す老人。難解な本をたて続けに読破する青年。すばやい筆の運びで絵をかきまくるにわか画家。あのバー・メッカ殺人事件の正田昭は、3年の間に、一人の女性に300通もの手紙を書いた。

一人一人が実に個性的に、ハツラツとしていた。かれらの生活は、一日一日が猛烈に濃縮されていた。

だが、無期囚たちは違う。

初めて無期囚たちに会った精神科医は、みんな奇妙な体験にとまどう。面接調査を終えて宿舎に戻ったとき、途方にくれてしまうのである。会ったばかりの囚人たちの印象が、たがいににじみあって、個人個人を区別し思い出すことができないのだ。

空色の囚人服が同じだからではない。無期囚たちの対応の仕方から、動作、話し方、表情までが、あまりにも似ていて、そこには個性のカケラもないからなのだ。

小木教授は死刑囚と比較対照するため、千葉刑務所に何日も泊りこんで観察した。

無期囚たちは、感動するということがなくなっていた。

芸術や人生哲学などと無縁であった。ヘイの外の世界にも興味を示さない。関心は看守のごきげんとか、今夜のメシは何だろうとか、そんな身近のことに限られている。視野はせばめられ、単調な生活にもあきることがない。

刑務所の役人に対しては従順そのもので、卑屈でさえある。

囚人たちは毎朝一定の時間に起され、あわただしく洗面をすませ、毎日ほとんど同じものをたべ、隊列を組んで工場へと歩く。「自由時間」にスピーカーから流されるラジオ放送も、あらかじめ刑務所が選択したものだ。

かれらに関するすべてのデータは、ボール紙で表紙をつけた「身分帳」にとじこまれていく。過去、入所時の性格・心理・知能テストの結果、刑務所内での規則違反……。

「身分帳」に貯えられた情報を、囚人をとりまく役人たちは自由に見ることができる。が、当の本人が自分の身分帳をみる機会は永遠にない。

がんじがらめの規律。四六時中の監視。そんな刑務所生活が、かれらの自発性、個性を奪ってしまうのだ。いわゆるプリゾニゼーション（刑務所ボケ）である。

刑務所に入れられた囚人たちは、初めささやかな“反逆”を試みる。スリはせっけんを失敬し、殺人犯は、ほかの囚人とけんかしてケガをさせる。一みごとに個性を発揮するのだ。

しかし、4年も経つと“個性”は急速に薄れてゆく。

時間がすべての個性を洗い流し、飲みこんでゆく。10年も経つと一“反逆”も個性もまったく消える。

死刑囚と無期囚。どちらも大半が殺人犯だ。教育、遺伝、経歴に、違いはない。とすれば、この2種類の囚人たちの心の違いは、素質的な差によるものではないといえるだろう。

死刑囚を変えたのは、確実にやってくる「死」であった。

南方の島で玉砕した日本兵たちは、前夜飲みあかし、ゲラゲラ笑い、泣き、実に多感だった、と生残り兵はいう。がんを宣告された学者や作家、そして死刑囚にも、傑作を残す人が少なくない。「死」に向いあうと人間の精神生活はひどく濃密になる。

一方、無期囚には「死」へのせっぱつまった恐れはない。そのかわり、自由のない単調な「生」が続く。そして、すばらしい作品を残した無期囚の話はあまり聞かない。

では、ヘイの外のわれわれは？

毎日、ラッシュアワーを出勤する。勤務先では、看守ならぬ上役の、最近とみに精細をきわめてきた管理の目にさらされる。自分に関するデータは、囚人番号に似た社員番号とともに、コンピューターという名のスマートな「身分帳」に記録される。仲間で酒を飲んでの話題といえば、無期囚同様、上役の悪口、社内人事……。

「無期囚らしさを身につけたとき、囚人は模範囚と名づけられるんです。模範囚と模範社員とは似ていると思いませんか」

作家である小木教授は、ペン・ネームの加賀乙彦の顔になってニヤッと笑った。

朝日新聞科学部編『心のプリズム』朝日新聞社刊  
1971年、科学部記者時代に書いたものです。